

愛に突き動かされた 働き



わたしは大きな患難と心の
憂いの中から、多くの涙を
もってあなたがたに書き
おくれた。それは、あなた
がたを悲しませるためでは
なく、あなたがたに対して
あふれるばかりにいでいて
いるわたしの愛を、知って
もらうためであった。
(2 コリント 2:4 口語訳)



わたしは、悩みと愁いに
満ちた心で、涙ながらに
手紙を書きました。あなたが
たを悲しませるためでは
なく、わたしがあなたがた
に対してあふれるほど抱い
ている愛を知ってもらう
ためでした。

(2 コリント 2:4 新共同訳)





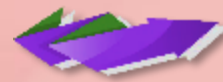
パウロのコリント人への第二の手紙を深く学んでいくと、使徒が教会の健全な状態に深い関心を寄せていることがわかります。

罪に満ちたこの世で神の道に従うことは決して容易なことではありませんでしたが、1世紀においては、自らをクリスチャンだと公言することには深刻な困難が伴う場合がありました。

パウロは、教会が内外の困難に立ち向かえるよう備えさせるとともに、無私の愛によって一つに結ばれた共同体を築くよう教えました。この教えから、私たちは今日、「命から命にに至らせる香り」（2コリ2：16）となることを学ぶことができます。



感謝



純真と誠実



愛のために計画を変える



赦しと愛の再確認



キリストにおける勝利

感謝

神は、いかなる患難の中にもわたしたちを慰めて下さり、
また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、
あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして
下さるのである。 (2 コリント 1:4)

コリント人への手紙第二は、パウロが「慰め」について最も詳しく語っている書簡です。当時、教会は困難な状況にあり、パウロが以前送った手紙によって、彼らは悲しみのどん底に突き落とされていました。

しかし、その悲しみは「神の御心にかなう」ものであり、悔い改めへと導くものでした (2コリ 7:10)。ですからパウロは、彼らがその悲しみに打ちのめされるのではなく、むしろ慰められることを願っているのです。

彼自身、命の危険にさらされ、氣力を失うような時期を経験したことがありました (2コリ 1:8-10)。しかし、神が彼を慰められたので、今や彼はその慰めを教会に伝えています (2コリ 1:6)。

神の慰め

それは私たちが恐怖から解放してくれる

それは、神が私たちを助けてくださったあの頃を思い出させる

それは、私たちが苦難に耐える助けとなります

それは私たちを霊的な成熟へと導いてくれます

それは、私たちが他者のためにとりなすよう促してくれます

私たちは、神に慰められたように、互いに慰め合います



Ⅱ コリント 1:3～7を読んでください。

(口語訳) **1:3** ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。 **1:4** 神は、いかなる患難の中にもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。 **1:5** それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。 **1:6** わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救とのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。 **1:7** だから、あなたがたに対していただいているわたしたちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである。

ここでパウロが感謝の気持ちをあらわしている理由は何でしょうか。私たち誰もが何らかの形で直面する苦しみに向き合う上で、何が役に立ったと思いますか。

純真と誠実

さて、わたしたちがこの世で、ことにあなたがたに対し、人間の知恵によってではなく神の恵みによって、神の神聖と真実とによって行動してきたことは、実にわたしたちの誇であって、良心のあかしするところである。(2 コリント 1:12)

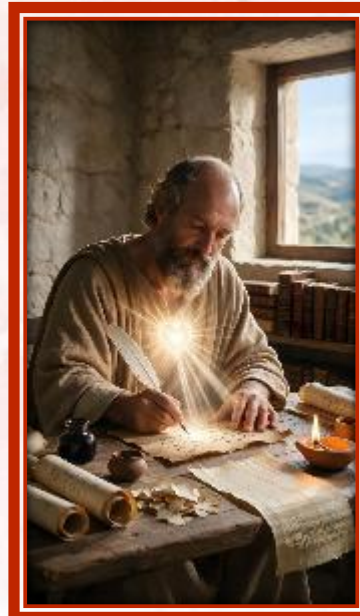
パウロを弱く優柔不断な人物だと決めつけ、見下す人々がいました(2コリ 10:10)。そのため、また自身の助言を人々に受け入れてもらうためにも、使徒である彼には、そうした非難に対して自らを弁護する必要がありました。

一人の人間として、彼は自分を取るに足りない者で見なしていました(エフェ3:8)。しかし、神の恵みによって、彼は良心が潔白であることを誇ることができました(2コリ 1:12)。



それゆえ、パウロの書簡には隠された意図などありませんでした。彼は、それらの手紙が、聖さと誠実さという文脈において——すなわち、彼らへの愛に基づき、ただ彼らの益を求めて書かれたものとして——読まれ、理解されることを願っていました(2コリ 1:13-14)。

彼とその仲間たちは、教会内でも外でも、彼の行いは神聖かつ誠実(純真)であると言ったことができた。



あなたが誠実な動機や意図で行動したにもかかわらず、疑われた経験はありますか。

私たちは他者の動機を疑うとき、
どれほど慎重さが必要でしょうか。

愛のために計画を変える

わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、
わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに
対して寛大でありたいためである。(2 コリント 1:23)

パウロは最初の手紙の中で、コリントの人々に自分がたどろうと
していた旅程を知らせました(1コリ 16:5-11)。

エフェソ → マケドニア → コリント → ユダヤ

後の手紙(現存せず、2コリ 7:8)の中で、彼は彼らを二度訪問するつもりであることを知らせていました
(2コリ 1:15-16)。

エフェソ → コリント → マケドニア → コリント → ユダヤ

しかし、彼は更に計画を変更し、コリントへの訪問を行わない
ことにしました(2コリ 1:23)。こうした変更により、彼は
優柔不断で気まぐれな人物だとして批判されることになりました。
なぜ彼は考えを変えたのでしょうか。

コリントで生じていた問題ゆえに、パウロが現地に赴くことは
必要であるように思われました。しかし、そこで直面すること
になるであろう反対は、彼が避けたいと願っていた対立を意味する
ものでした。それは、彼がコリントの人々に対して深い愛を
抱いていたからにはほかなりません(2コリ 2:1-4)。



I コリント **16:5**～**7** を読んでください。

16:5 わたしは、マケドニア経由でそちらへ行きます。マケドニア州を通りますから、**16:6** たぶんあなたがたのところに滞在し、場合によっては、冬を越すことになるかもしれません。そうなれば、次にどこに出かけるにしろ、あなたがたから送り出してもらえるでしょう。

16:7 わたしは、今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくない。主が許してくだされば、しばらくあなたがたのところに滞在したいと思っています。

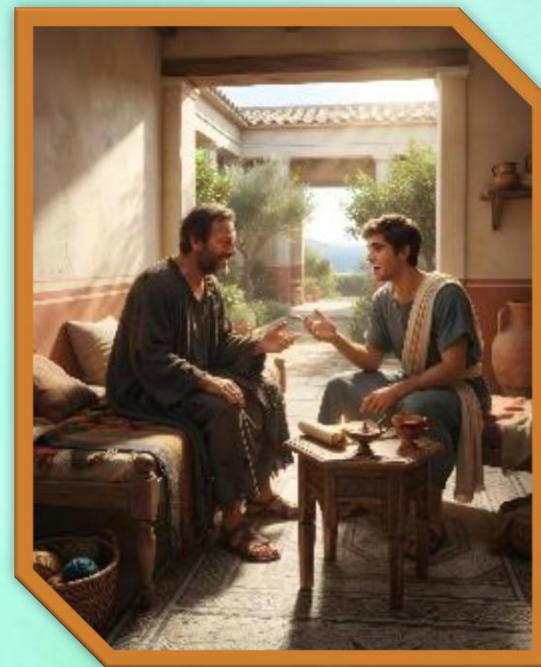
パウロの当初の旅行計画は、
どのようなものでしたか。

赦しと愛の再確認

もしあなたがたが、何かのことについて人をゆるすなら、わたしもまたゆるそう。そして、もしわたしが何かのことでゆるしたとすれば、それは、あなたがたのためにキリストのみまえでゆるしたのである。(2 コリント 2:10)

パウロがトロアスへ向かっている間、テトスはコリントへ行っていました。パウロはトロアスからマケドニアへと向かいましたが、コリントの教会に関する知らせを届けるはずのテトスがトロアスで彼と落ち合わなかったため、ひどく心を痛めていました(2コリ 2:12-13)。

その後まもなく、テトスはマケドニアでついにパウロと会いました。彼はパウロに、使徒の勧告に対して教会が非常に好意的な反応を示したことを伝えました(2コリ 7:5-9、13-16)。



彼らが解決すべき問題の一つに、教会の懲戒に関することがありました。使徒の指示に従い、問題を起こした当事者は戒めを受け、その戒めを受け入れていました。そこでパウロは彼らに、次の段階へ進むよう求めます。それは、赦しと回復です(2コリ 2:5-11)。

I コリント 7:5～13 を読んでください。

7:5 マケドニア州に着いたとき、わたしたちの身には全く安らぎがなく、ことごとくに苦しんでいました。外には戦い、内には恐れがあったのです。**7:6** しかし、気落ちした者を力づけてくださる神は、テトスの到着によってわたしたちを慰めてくださいました。**7:7** テトスが来てくれたことによってだけではなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、そうしてくださったのです。つまり、あなたがたがわたしを慕い、わたしのために嘆き悲しみ、わたしに対して熱心であることを彼が伝えてくれたので、わたしはいっそう喜んだのです。**7:8** あの手紙によってあなたがたを悲しませたとしても、わたしは後悔しません。確かに、あの手紙が一時にもせよ、あなたがたを悲しませたことは知っています。たとえ後悔したとしても、**7:9** 今は喜んでいます。あなたがたがただ悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからです。あなたがたが悲しんだのは神の御心に適ったことなので、わたしたちからは何の害も受けずに済みました。**7:10** 神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。**7:11** 神の御心に適ったこの悲しみが、あなたがたにどれほどの熱心、弁明、憤り、恐れ、あこがれ、熱意、懲らしめをもたらしたことでしょう。例の事件に関しては、あなたがたは自分がすべての点で潔白であることを証明しました。**7:12** ですから、あなたがたに手紙を送ったのは、不義を行った者のためでも、その被害者のためでもなく、わたしたちに対するあなたがたの熱心を、神の御前であなたがたに明らかにするためでした。**7:13** こういうわけでわたしたちは慰められたのです。この慰めに加えて、テトスの喜ぶさまを見て、わたしたちはいっそう喜びました。彼の心があなたがた一同のお陰で元気づけられたからです。

パウロが彼らに書き送った手紙は、どんな結果をもたらしましたか。
その結果に対して、パウロはどんな反応をしましたか。

キリストにおける勝利



わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである。(2 コリント 2:15)

トロアスで福音を力強く宣べ伝えるための「扉」を神が開いてくださったことについて語る中で、パウロは賛美と勝利の叫びを上げます。「しかるに、神は感謝すべきかな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリストを知る知識のかおりを、至る所に放って下さるのである。」(2コリ 2:14)。

至る所に広がる香りのように、キリストについての知識はすべての魂に届きます。コリントの人々にとっても、私たちにとっても、この香りは永遠の命の香りです。しかし、その招きを拒む人々にとっては、それは死の香りとなります(2コリ 2:15-16)。



パウロはその務めに伴う責任に目を向け、個人的な利益を求めるのではなく、聴く人々の救いを願って誠実にそのメッセージを伝えるべきであることを説いています(2コリ 2:17)。



あなたが取り組むすべての事柄において、
とりわけイエスの御名によってそれを行う
とき、何があなたの原動力となっていますか。

この忠実な使者テトスは、コリントの信者たちの間に驚くべき変化が起こったという、励ましとなる知らせをもたらした。多くの者はパウロの手紙の中の教えを受けいれて、自分たちの罪を悔い改めた。彼らの生活は、もはや、キリスト教の恥辱ではなくなり、実地的な信仰ということ を力強く示すものとなった。 [...]

神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導く。人の心に神の恵みが働く結果生じる悔い改めは、罪の告白と放棄に至らせる。パウロは、コリントの信者たちの生活にこのような実が実ったと言ったのである。